

巻頭言

「夏目漱石を読み直して」

理事長 新谷 友良

今、朝日新聞には夏目漱石の「吾輩は猫である」が連載されています。また、岩波書店からは「定本漱石全集」が刊行されています。岩波書店の案内によると「漱石全集」が初めて刊行されたのは1917年12月、それ以来7度に亘って刊行が繰り返されてきた、とあります。

このような朝日新聞や岩波書店の企画に触発されたわけではありませんが、昨年の10月初めから今年の1月末まで、時間がかかりましたが漱石の中・長編小説を通読しました。「吾輩は猫である」から「明暗」までの15の作品です。「坊ちゃん」は小学校、その他の作品は中学や高校で最初に読んだ記憶があります。その後、再読した作品がいくつかありますが、今回改めて読み直してみても、中学や高校辺りの年齢でこの作品が本当に面白かったのか不思議でした。名作だ、必読の図書だと言われて、やみくもに読んだだけかもしれません。

作品年表を見ますと、処女作の「吾輩は猫である」が1905年、絶筆の「明暗」は1916年です。わずか10数年でこれらの15の作品やその他の短編小説・評論などを書いたこととなります。1年に1作以上という大変な執筆量です。そして、今回通読した15の作品から受ける印象は、途切れることなく続いている緊張した心理描写でした。

漱石は幼いころに養子に出され、肉親の愛情への飢えから来る葛藤を、抜群の知性で何とか耐え抜いてきたと思えます。また、葛藤をもたらすものも癒しをもたらすものも女性であり、それら女性を巡る心理の動きが非常に鮮明です。「三四郎」の美禰子、「それから」の三千代、「明暗」のお延や清子は葛藤の原因であり、「坊ちゃん」の清や、少し微妙ですが「門」の御米などは癒しの施主となっているように感じます。

そして、そのような自分を取り巻く男女との軋轢のなかで、漱石が最後の拗りどころとしたのは「倫理」と呼べるものではなかったかと思えます。「今だ。こんな事は生涯に二度とは来ない。この機をはずすと、もう駄目だ。生涯真面目の味を知らずに死んでしまう。死ぬまでむく犬のようにうろうろして不安ばかりだ」。これは「虞美人草」の中で宗近が小野に言う言葉ですが、毎日の生活と知性の折り合いを「真面目＝倫理」に求めた漱石の覚悟のようなものが詰まっているような気がします。